

書 評

M. Marcovich (ed.),
Clementis Alexandrini Paedagogus,
E. J. Brill, Leiden/Boston 2002, pp. XVIII+229.

秋 山 学

本書は、2001年に亡くなった Miroslav Marcovich 教授による遺作とも言うべき作品である。J. C. M. Van Winden の助力を得たとされ、本書はその Van Winden に謹呈されている。序につづく Marcovich 教授の年譜・業績一覧表も、同氏によるものと思われる。さいわい評者は、クレメンスの二著作すなわち『プロトレプティコス』および『パイダゴゴス』を収めた手写本のマイクロフィルムを所有している。しかしながら校訂テキストの書評という任は、現在の力量を超えるものがあり、クレメンスの写本伝承・公刊テキストの歴史やマルコヴィッチ教授の業績をまとめて紹介することで、責を果たしたい。

アレクサンドリアのクレメンスによる『パイダゴゴス』は、事実上唯一の手写本により伝えられている。それは「アレタスのコデックス」と呼ばれる Codex Parisinus graecus 451 (P) であり、913年9月から914年8月の間に、書記 (notarius) バァネスによりカッパドキア・カイサリアの大司教アレタス (860-935) のために書き写されたものである。この写本 P は 401+2 葉より成り、羊皮紙製でサイズは 24.5×18.5 cm (書域は 14.5×11 cm)、1 頁につき 24 行を収めている。P は、後述するようにクレメンス、ユスティノス、エウセビオス、アテナゴラスといった初期教父たちの著作を含み、かつ年代が判明する最初期のギリシャ語小文字写本として、極めて高い価値を持つ。しかしながら随所に破損箇所を含むほか、頁数の打ち方に誤りが散

見される (f.370 から f.379 の頁数欠落など。したがって現存の葉数は 403 葉ではなく 393 葉である)。そして破損のうち最大のものが『パイダゴゴス』第 1 巻なのである。これらを併せ計算すると、結局元来の総葉数は 476 葉であったと思われる (cf. O. Stählin, GCS12, Leipzig 1905, S. XVII-XVIII)。

P のうち、クレメンスの『パイダゴゴス』は f.57r から f.154v までを占めている。しかし、f.56v までを占める同じくクレメンス『プロトレプティコス』の末尾部分に続く『パイダゴゴス』は、f.57r で第 1 巻 96 章 1 節から始まっている。このため第 1 巻に関して P はその大半を失っており、失われた部分については P を写した二つの古写本 M と F に頼らざるを得ない。M (Mutinensis Misc. gr. 126: α . S. 5. 9) は 11 世紀に書き写された羊皮紙の写本で、295 葉より成り、『パイダゴゴス』は 48v-171r に収められている。一方 F (Laurentianus V 24) は、12 世紀に写された羊皮紙製写本で 243 葉より成り、『パイダゴゴス』のみを収めている。F は P から直接ではなく、P の中間的写本から写されたものであり、ときおり P とは異なる読みを提供している。なおバアネスは改竄、欠損、書き入れ、逸脱などに満ちた親本から筆写したため、アレタス自身がバアネスのテキストの修正に努めている。本書ではバアネスの手 (による字) を P1、アレタスの手を P2、さらに後代の筆写者の手を P3 として区別している。アレタスによる修正の大半は、異本照合によるものではなく、彼自身の思索による見解に基づいている。バアネスとアレタスは両者とも茶色のインクを用いているほか、二人の筆跡は酷似している。このような重層的で複雑多様なテキスト事情を踏まえた上で、本書は前半部に、最新の文献学的校合に基づく『パイダゴゴス』テキストを収め、後半部 (p. 207ff.) にはアレタスらによる中世期のスコリアを収録して、P の元本そしてクレメンス自身の声を再生させ得たものとなっている。

『パイダゴゴス』の初版本は、人文学者ピエロ・ヴェットーリ (1499-1584) により、フィレンツェで 1550 年に出版された。これは F をそのまま活字にしたものであった。それ以降、スィルブルク (1592)、ポッター (1715)、ディンドルフ (1869) などがテキストを公刊した (ポッターのものがミーニュ版 *Patrologia Graeca* 第 8 巻に再録されている)。だが今日までに公にされた版本のうち、唯一校訂本の名に値するのは O. シュテーリンによるものである (1905, GCS12)。このテキストは、P, M, F を校合した十分信頼に値する版本であり、さらに彼は、すでにポッターが行ってい

たクレメンスの典拠の研究を徹底させた。ただシュテアーリンは写本学に主たる関心を寄せ、テキストの神学的意味に通暁していたとは言えず、結果的に、彼のテキストは満足の行くものになったとは言い難い。シュテアーリン自身もこのことを自覚していた模様で、初版発刊後、クレメンス全集の索引を公刊した際（1936, GCS39）、『パイダゴゴス』に関するだけで12頁に及ぶ「補遺」と「訂正」を付加している。またU.トロイとL.フリュヒテルは、この第3版において（ベルリン、1972年）、さらに7頁に及ぶ「追補」と「訂正」を付け加えている。一方 Sources Chrétiennes シリーズに入っている H.-I. マルーらによる仏語対訳版のギリシャ語テキストは、シュテアーリンによる第2版（1936）の異読欄を省いた再録である。かくして『パイダゴゴス』の新たな校訂版テキストの公刊は、焦眉の急であった。それがこのたび、マルコヴィッチ教授の手によって完成されたことは、まことに大きな意義があると言えよう。

本書で特筆すべきは、前述のようなテキスト校訂のレベルアップもさることながら、クレメンスが念頭に置いていたと思われる諸種古典文献の典拠箇所 (Quelle) が、極めて詳細かつ正確なかたちで下部欄外に記されていることである。この整備された典拠表示は、古典学者であるマルコヴィッチ教授の真骨頂とも言える。教父文献の校訂テキストや近代語訳は、注釈や訳注などの方向性によって、読者をいかなる方向に誘おうとするのか、編者・訳者の方針を明確に示したものとなる。これまで教父たちは、主として神学・教義史の資料として取り扱われる傾向が強かった。ただ、特にアレクサンドリアのクレメンスのように古典に通じた教父に関しては、新たな方向性を採る可能性もありえた。本書は古典古代文献史のうえにクレメンスの著作を置き直した画期的な業績だといえる。ただ願わくは、先に公刊された同じくクレメンスの『プロトレプティコス』(M. Marcovich (ed.), *Clementis Alexandrini Protrepticus*, E. J. Brill, Leiden/New York/Köln 1995) のように、典拠等の索引が整備されていれば、と惜しまれる。教授の死がそれを妨げたのであろうか。

ここで故マルコヴィッチ教授について付言しておく。教授はイリノイ大学の古典学科名誉教授で、Illinois Classical Studies の創刊・監修者でもある。『ヴァガヴァッド・ギター』(1958) などの著書も含め、多言語にわたる博覧強記の古典学者として名高い。ヘラクレイトスの断片集編纂 (1967) は名声を獲得して版を重ねているほか、古典文学の業績としては『ギリシャ悲劇における三語彙のトリミター』(1984) や『ギリシャ・ローマの宗教とグノーシス主義』(1988)、『ギリシャ詩研究』(1991)

などがある。仕事の本拠を次第にギリシャ教父学関連へと移行させ、1986年にヒッポリュトスの『全異端論駁』の校訂版を刊行して以降 (Hippolytus, *Refutatio Omnium Haeresium*), 上述の Codex Parisinus graecus 451 (P) 写本に収められた教父の作品を中心に、順に校訂本を刊行してきた。P 写本に収められている著作の順に列挙するならば、Clemens Alexandrinus, *Protrepticus* [f. 1-56v] (1995, 前掲), Clemens Alex. *Paedagogus* [f. 57r-154v] (2002, 本書), Ps. Justinus, *Cohortatio ad Graecos* [f. 163v-187v] (1990), Athenagoras, *Legatio pro Christianis* [322v-348r] (1990), Athenagoras, *De resurrectione mortuorum* [348v-367v] (2000) となる。P の f. 188r-322r には Eusebius の *Praeparatio evangelica* I-V が、また f. 368r-401v にはおなじく Eusebius の *Contra Hieroclem* が収められているが、これらに関してはすでに、すぐれた校訂版テキストが Sources Chrétiennes に収録されている。したがってマルコヴィッチ教授の後半生は、Codex Parisinus graecus 451 に収められた諸作品の改良版未出テキスト公刊に献げられ、その事業は今回の Clemens, *Paedagogus* 発刊によりまさしく完遂された、とすることができる。

教授にはさらに、教父学関係の著書として『教父文献のテキスト批判』(1994) があるほか、教父文書の校訂版としても Prosper Aquitanus, *De Providentia Dei* (1989), Justinus Martyr, *Apologiae pro Christianis* (1994), Tatianus, *Oratio ad Graecos* (1995), Theophilus Antiochenus, *Ad Autolyicum* (1995), Justinus Martyr, *Dialogus cum Tryphone* (1997), Origenes, *Contra Celsum* (2001) などがある。またトイブナー古典叢書からも Theodorus Prodromus (1992), Diogenes Laertius (1999) らの著作の校訂テキストを公にしている。

いずれにせよ、本書は教父文書を、古典古代文献という言葉ばかり「普遍的」な地平に戻して世界に提供したという大きな意味を持つ。クレメンスの古典古代性とあわせ、古典学者マルコヴィッチ教授の透徹した博識を十分に認識させてくれる労作である。本書を基に、あらためて「教父」あるいは「哲学者」としてクレメンスを捉えることができるかどうかは、われわれに課せられた課題であろう。